新聞記事抜粋配信用
配信:法人本部 秘書・広報課
新聞名 日経・朝日・毎日・読売・静岡・中日・その他( ) 掲載日 9/30 朝刊・夕刊 22 ページ

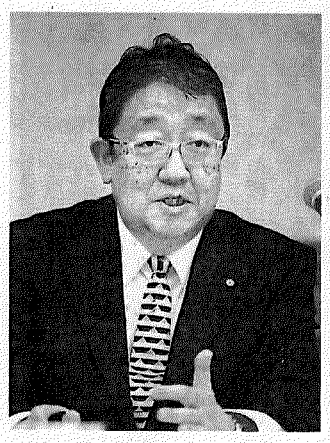
静岡新聞社 第35回「読者と報道委員会」

静岡新聞社の「読者と報道委員会」は12日、第35回会合を静岡市駿河区で開いた。議題はロシアによるウクライナ侵攻を巡る報道と、4月にスタートした金曜夕刊の見開き特集「NEXT（ネクスト）ラボ」。聖隷福祉事業団理事常務執行役員の鎌田裕子委員、弁護士の近藤浩志委員、認定NPO法人エコエデュ理事長の山本由加委員の3氏が本紙側と意見交換した。

（進行は石川善太郎編集局長）

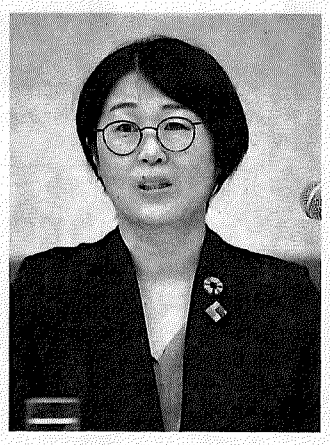
鎌田裕子委員

かまた・ゆうこ　聖隷三方原病院などで看護師として勤務後、聖隷福祉事業団法人本部で人材開発部長などを歴任。2017年1月から同事業団常務執行役員。19年6月から理事。浜松医大大学院修士課程修了。掛川市出身、浜松市在住。



近藤浩志委員

こんどう・ひろし　1996年弁護士登録。2017年静岡県弁護士会会長。日本司法支援センター法テラス沼津支部長、沼津人権擁護委員協議会会長歴任。明治大法学部卒。東伊豆町出身、沼津市在住。



山本由加委員

やまもと・ゆか　認定NPO法人「しずおか環境教育研究会・エコエデュ」理事長。岐阜大院で森林学を学び県林業職（県職員）に。途中退職後、農林業系ライター等を経て2020年6月から現職。静岡市清水区出身、在住。

ウクライナ侵攻

ロシアによるウクライナ侵攻は国際秩序を大きく揺るがしました。通信社のニュース素材と地元に根差した話題を組み合わせ、県内に引き寄せた報道を展開し、県民の関心を高めるのが地方紙の責務です。その役割を果たせたでしょうか。

近藤委員　ロシアほどの軍事大国が隣国に攻め入るのは第2次世界大戦までさかのぼるのではないか。非常にショックな出来事だった。限られた素材をどう使うかは悩みどころだっただろう。読者が知りたいのは事実。紛争では罪のなすりつけ合いになってしまうことがある。どちらかの主張に偏らないように伝える必要がある。事実をそのまま報道する姿勢は評価できる。一方、ロシアとウクライナの歴史的な関係や、なぜ戦争になってしまったかについては、もう少し深く伝えてほしかった。

鎌田委員　私を含めて戦争を体験していない世代が多くなっている。2月24日以降、日々動く情勢を事の次第に沿って伝えたのは分かりやすかった。戦争が起きた時、どのような支援が必要なのか、実際にできることは何なのかを考える上でも、新しい情報は必要だと思う。3月2日と17日の論壇では、西側諸国とロシア側の異なる視点からの評論家の見方が掲載されている。双方の視点を対比させ、一つの紙面でまとめた方がより整理されたのではないか。

山本委員　テーマにウクライナ侵攻を選んだのは、戦争をいかに市井に伝えていくべきかとの、静岡新聞の危機感の現れに感じた。明確な答えは出せないが一緒に悩んでいきたい。県民のウクライナやロシアへの思いを取材し、伝えるのは重要でまさに地方紙の神髄だ。ロシアや中国が見ている世界は理解しがたいが、次の世代の平和のためには、そこを掘り下げていく必要がある。両論併記から一歩踏み込んで若い世代に対し、「世界をこう見ていったらどうか」というメッセージを提示する特集があってもいいのでは。

腕を後ろ手に縛られた市民の遺体の写真を掲載するか、難しい判断を迫られました。

鎌田委員　新聞社として事実に近いものを視覚で訴えるのは大事。ただ、伝えた後の責任を負えるのかまで考えて報道する必要があると感じる。読者がショックを受けるかもしれない。そこまで考えておかなければ報道側の一方通行になりかねない。掲載を見送ったのは賢明な判断だったと思う。

山本委員　ネットニュースを探すと、配信写真よりも凄惨（せいさん）な写真や動画が次々に出てくる。若者はむしろこうした動画で現実を把握している。この写真1枚であれば許容されたのではないか。戦争に市民が巻き添えになるとはどういうことなのか、現実を示している。

近藤委員　ネットニュースは現実を知る手段になっている。いま何が起きているかを知りたい人は、自ら検索して深掘りし、よりすさまじい写真を目にするだろう。他方、新聞はさまざまな世代が読む。惨劇を知りたい人ばかりではない。新聞という媒体として、掲載しなかったとの結論を支持する。

県内経済への影響など、さまざまなテーマで社説を展開しました。戦争と平和に地方紙としてどう向き合っていくべきでしょうか。

近藤委員　なぜ戦争が起きたのか、どうしたら止められる世の中をつくることができるのか。社説の主張には、私を含めて皆が考えていかなければならないことの種があると感じる。新聞報道、それも裏付けがある情報を発信できる国であることが一番大事だろう。一方、日本や県内で生活するロシア人にも苦悩がある。プーチン政権は判断を誤った。ただ、それによってロシア人が誹謗（ひぼう）中傷を受けるようなことがあってはならない。この視点も大事だ。

鎌田委員　社説はテーマや見出しに目が向く。興味を引くだけでなく、読んでみて理解できるかどうか。端的に分かりやすく、重要な指摘をしている社説だった。世界、ウクライナ、ロシア、日本、県民など、多様な視点から掘り下げることも必要だと思う。そして未来軸の視点も欠くことができない。これから何が起きるのかという展望、何をしていくべきかと考えを膨らませられる要素があるといい。今回は視点を広げることができた。

山本委員　8月29日付の社説「対ロ制裁と物価高　自由と連携を考えよう」は、重ならない大きなテーマを二つ重ね、静岡新聞の強い意志を感じた。さらに「ですます」調で書かれているのも良かった。実体験がない若者にとって戦争はやはり、どこか物語に思えるだろう。しかし、小麦やエネルギー価格の高騰といった変化は、戦争が自分の生活にも関わっていることを実感させる。親世代が描いていた世界と全く違う世界を今後、若者たちは歩んでいくことになる。それをごまかすのではなく事実としてきちんと伝えている。ぜひ、社説に込められた思いを発展させながら今後も記事を一つ一つ紡いでもらいたい。

歴史的な背景 より深く
世界見る目 養う道標に
惨劇の写真 配慮に理解

夕刊見開き特集 NEXTラボ

毎週金曜の夕刊企画として2014年から掲載してきた「こちら女性編集室（こち女）」をリニューアルし、4月から「NEXTラボ」がスタートしました。ジェンダー平等の意識が高まる中、女性の視点に限らず、社会に暮らす多様な人の視点を大事にしようという趣旨です。オープンデータ活用やウェブとの親和性強化も含め、実験的なページを目指しています。

鎌田委員　女性活躍に光が当たる時代が続いてきたが、その一方で頑張っている男性もいる。「誰もが活躍できる」という視点で考えていかないと、ひずみを生じる懸念もある。読者の疑問に応える「NEXT特捜隊」の企画も含め、一方的に発信するメディアから、コミュニケーションツールとしてのメディアへ、新しい方向性を打ち出す試みと受け止めている。読んだ人がその情報を広げたくなるような、読者同士の情報交換を促す記事が増えていると思う。

山本委員　このページについては以前から「女性」でくくる枠組みはどうかと感じており、見直しは良かった。新企画での社会性の強い重いテーマやデータ活用などの新しい試みも評価したい。担当は女性中心ということだが、こうした企画に女性も男性も関係なく参画していくことが次のステップではないか。重厚なテーマを、生活の身近なところに引きつけて考えていくというスタンスは、地方紙ならではと感じている。この切り込み方を発展させていってほしい。

近藤委員　朝刊にない読み物として、バラエティーに富んだ内容を取り上げていて面白い。双方向性やデータ活用などの視点も良い。ただ、「女性」という分かりやすいターゲットがなくなった半面、実際に誰にどう読まれているかという分析があってもいいかもしれない。また、「こち女」のタイトルはなくなっても、女性に関して取り上げるべき話題はたくさんある。これまでやってきたことも角度を変えて、引き続き取り組んでいってほしいと思う。さらに面白い読み物を期待する。

新たなページは、ウェブとの連携も強化していく方向です。ウェブは紙面より長い記事が掲載でき、動画の要素も盛り込めるなど自由度が高く、テーマも重いものが読まれるのかどうかなど、試行錯誤しています。

山本委員　フェイクニュースが社会問題になり、何が本当なのかが曖昧になる中、ひとつのテーマを掘り下げて、誠実にデータを示していくことの意味は大きい。これまでも新聞が担ってきた役割ではあるが、ウェブも含めて新しい形でやろうとしていることは評価したい。記者が普段生活する中で感じた疑問を大事にし、ニッチな話題であっても、確かに困っている人がいるテーマを着実に取り上げていってほしい。

鎌田委員　ジェンダーや障害者の問題などに対し、少しずつ社会の認識が変わってきたとはいえ、まだまだオープンになっていない分野がたくさんある。知ることで、次のステップに進めるような分野の取り組みを期待したい。また、社会の変化に敏感に対応するような記事も求めたい。ウェブでの記事の示し方は、読者は関心があれば長くても読むし、斜め読みもする。あまり気にしなくてもよいのではと思う。

近藤委員　紙面的には広くて読みやすい。ただ、読まれるかどうかは過度に気にしなくてもよいのでは。挑戦したいことがあればどんどん挑戦し、反応を見ていけばいい。個人的には、夕刊は夜、一日が終わった状態で読むので、分かりやすさや面白さを追求してもらえたらという希望はある。参院選で、読者から寄せられた質問に対する各候補者の回答を特集したのは良かった。それぞれの違いが際立ち、参考になった。

鎌田委員 双方向型 新たなツール
山本委員 性別を超えた参画 期待
近藤委員 「挑戦」「面白さ」追求を

編集局から

■ウクライナ侵攻■　世界で起こっている事象をどう報道するのか。地方紙として、どう身近に引き付けて伝えるか、日々自問を続けるテーマについて、事実や背景を明確にすることや遠く離れた私たちがしていける何かがあるのかを提案していくことなど、自分たちがすべきことを再確認した。これからも現地の視点、地方の視点、グローバルな視点を織り交ぜながら紙面作りをしていきたい。

侵攻から半年余り。遠く離れた国での戦争を、読者に少しでも「自分ごと」と感じてもらえる報道に努めてきた。県内にも両国の出身者が住み、戦火を逃れてきた人がいる。そして平和のために行動を起こした県民も。そうした人々の声を、より分かりやすく届ける努力を重ねていく。

■NEXTラボ■　「性別にとらわれず、一人の人として社会にどうかかわるべきかという視点で紙面展開したい」。2017年から続けてきた「こちら女性編集室」をことし4月、「NEXTラボ」に改称させるきっかけとなったスタッフの思いだ。

人には性別に限らず多様な属性があり、疑問や悩みはさまざま。社会に生きる人の生の声から取材し、気付きや共感を広げたい。読者の疑問に応える「NEXT特捜隊」を含め、ウェブ発信や双方向性も強化していく。

行政などが公表しているオープンデータを可視化し、本質を突いた課題を読者に伝えていくことも求められている。「ラボ」にふさわしいさまざまな「実験」に果敢に取り組んでいきたい。

※写真撮影時のみ、委員にマスクを外していただきました。